

咲がそら
いのち

日蓮大聖人の教えを正しく伝える法華宗



法華經には七つのたとえ話があります。その中の一つである、如来寿量品第十六の「良医治子のたとえ」というお話を紹介します。

あるところに腕の良い、人々からも尊敬される医者（良医）がおり、彼には多くの子供がいました。ある時、その良医が外出した際、誤って薬棚にある毒薬を子供達が飲んでしまったのです。良医が帰宅すると、そこには毒に害された子供達が倒れ、苦しんでいたのです。良医は子供達を助けるために、色も香りも勝れた、毒によく効く薬を飲ませました。すると毒気が軽かった子供は素直にその薬を飲み苦しみから解放されたのですが、完全に毒気に犯されてしまった子供は、その薬さえも毒だと思い込み飲もうともしません。良医は考えた末に、一度外出して使いの者を出し、子供達に「父親（良医）は外出先で死んだ」と伝えさせました。父の死を聞いた子供達は、頼る人のいなくなった身を思っ繰り返して泣いて悲しみました。悲しみ嘆いてを繰り返しているうちに、子供達は毒気も忘れ意識を取り戻し、良医の残っていた良薬を飲み全員が苦しみから解放されたのです。みんなが正しい意識を取り戻したことを知り、良医は再び姿を現し子供達は大いに喜んだのです。

このお話では良医は仏、子供は我々衆生、そして良医が亡くなったということは、仏の入滅にたとえています。仏の入滅は、衆生の顛倒した心を正しい心にするための仏の巧みな手段です。そして、衆生が正しい心と呼び覚ました時、仏はその姿を現すでしょう。

本仏の慈悲によって末法に生きる私達は救われ、成仏のための全ての功德が備わった最上の良薬であるお題目と出会うことが出来たのです。この良薬を飲めば（お唱えすれば）成仏を叶えるだけでなく、日常生活で起きる不安や苦しみも取り除くことが出来るでしょう。日々の生活の忙しさの中にあっても、一遍でも多くのお題目を信じて唱えるという気持ちを持ちましょう。

※法華宗のホームページでは法華七喻（七つのたとえ話）をまんがでわかりやすく紹介しております。ぜひご覧下さい。

